懸け橋の向こうに

第1部 1

青春18きっぷ 五輪へ続く

「鳥の巣」原点に日本

東京、ソウルに次ぐアジア三回目の夏季五輪が今年八月、中国・北京で開かれる。国際スポーツイベントの開催準備の舞台裏では、日中の多くの人々が汗を流す。その姿は長年の交流を象徴するとともに、両国に横たわる様々な課題を乗り越えようとする姿にも映る。スポーツや教育、環境……。様々な分野の「懸け橋」を通じ、両国間の現在と未来をたどる。

北京五輪のメーンスタジアムとなる「鳥の巣」（北京市、写真上）と呉教授＝写真　剣持宮幸

北京市の中心、天安門から「鳥の巣」の愛称で広場の約八キロ北に位置する五輪メーン会場。中でも目をひくのは灰色の鋼鉄を網目状に組んだ外観。観光客らが次々と訪れ、記念写真を撮り合う姿が途絶えることはない。

この「国威発揚」の施設に日本の建築スピリットとつながる考えがあることはあまり知られていない。「激しいスポーツの場を丸く柔らかい形で表現するのは東洋の発想。鳥の巣のかわいいイメージを感じ取ってもらいたい」。清華大建築設計研究院の呉耀東教授（42）は静かに話す。

「街と建築の調和が重要」という持論の原点は一九九二年から三年間の日本への留学経験にある。東京大の博士課程で「路上観察学」で知られる建築家、藤森照信教授に師事した。

北京の都市計画全般に携わる呉さんは、五輪施設の計画にも関与。主要施設の一つ「国家体育館」の仕様決定では、鳥の巣とのバランスを考慮したデザイン変更を求めた。鳥の巣をスイス人建築家と共同設計した中国建築設計研究院の責任者にもアドバイスする。

「街を知るには歩くこと」が藤森教授の教えだった。約二年かけ北海道から九州まで建物や建築家を訪ね、日本の現代建築に関する博士論文をまとめた。普通列車乗り放題の「青春18きっぷ」を愛用。途中下車を重ね、車を使わず自分の足で街を歩き、自分の目で観察し自分の手で触れた。

「日本人の集まる場所で暮らしたい」。留学生会館を飛び出して埼玉県内の団地で暮らし、列島の四季にも親しんだ。「日本で学んだ経験が私の〝心〟につながっている」と強調する。

研究室の教え子が今春からの日本留学に備え、中国・長春市で日本語研修を受ける。「現代の大都市の表情は似通っている」と嘆く呉さんは、かつての自分の姿を重ね合わせ、東洋ならではの建築文化の発展に期待を寄せる。

交流の舞台はスポーツ競技でも広がる。

「進攻！　進攻！（前に出ろ）」。昨年十二月七―九日に東京体育館（東京・渋谷）で開かれた柔道の嘉納杯東京国際。男子60キロ級で優勝した日本選手と対戦した中国選手に檄（げき）を飛ばしたのは中国国旗を胸にあしらったジャージー姿の光本健次さん（56）。

東海大で教べんを執っていた光本さんは昨年八月、中国男子チームのコーチに就任した。ロス五輪金メダリストの山下泰裕教授（50）に請われ、研究休暇を利用して単身中国へ。「礼に始まり、礼に終わる」という柔の心をたたき込み、まず、ゴミが散らかり放題だった道場をきれいにするところから始めた。

初めてのメダルを目指すチームを日本へ合宿に招くなど支援を惜しまない。感情的な対立となった二〇〇四年のサッカー・アジア杯決勝の際のように、緊張することも少なくない両国間。「敵に塩を送るなんて」との批判もある。「五輪では日中選手の決勝戦が多くあればいい。それだけ負けずに勝ち残ってきたということだから」と山下さん。対決は畳の上でしか考えていない。